



● 国際シンポジウム Part1 「第 2 回 AMIN 会議」を終えて

はじめに

筑波技術大学創基 20 周年記念を兼ねた第 2 回 AMIN 会議が、10 月 23 日からの 3 日間、東京都中央区の晴海グランドホテルで開かれました。AMIN とは、「アジア医療按摩指導者ネットワーク」の英名の略称です。その目指すところは、アジアの視覚障害者にマッサージを普及するための活動に取り組む指導者が、専門的な知識と技術を共有しつつ互いに資質を高め合うことにあります。昨年 9 月に開かれた世界盲人連合アジア太平洋地域協議会 (WBUAP) のマッサージセミナー (つくば大会) の最終日で筑波技大が提唱し、1 年余りの準備を経て、今回の会議で正式発足の運びとなりました。日本財団の資金援助のもと、筑波技大に設置された「AMIN 推進委員会」と事務局が日常の運営に当たることになります。以下、会議の概要を述べ、AMIN 発足の意義と今後の課題について触れてみたいと思います。

1. 会議の概要

(1) 参加国と参加者の数

今回の会議には、日本を含む 13 カ国・地域^{*} から、37 人(うち付添 13 人)の海外参加者を含む 88 人が集いました。この他に、JICA 沖縄国際センターの「視覚障害者マッサージ指導者育成コース」で学ぶ 5 名の研修員(スリランカ、中国、サモア、マレーシア)がゲスト参加したことで、国際色がいっそう豊かなものになりました。

海外からの参加者は、現役のマッサージ指導者と各国盲人協会の代表者たちです。国内からは、筑波技大および日本財団の関係者、視覚障害者団体の代表の他に、AMIN のサポート組織である「講師人材バンク」(講習会の講師とテキスト執筆等を担う協力者組織)の登録ボランティアも全国から多数駆けつけてくださいました。こうした華やいだ顔ぶれと国際色に包まれた会場を舞台に、田端美智子氏の同時通訳のもと、会議の火蓋が落とされました。

※参加国・地域：バングラディッシュ、カンボジア、フィリピン、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、ラオス、タイ、ベトナム、台湾、香港、日本

(2) 開会式と記念講演

第 2 回 AMIN 会議は、本学学長 大沼直紀の歓迎の辞で幕を開けました。来賓として最初に挨拶に立った笹川吉彦氏(日本盲人福祉委員会理事長)は、「按摩は盲人にとって重要な職業。アジアの多くの視覚障害者がこの技術を手に自立の道を歩んでほしい。この夢を AMIN で育つ指導者のリーダーシップに託したい」と述べ、AMIN 設立の意義を



大沼学長による歓迎の辞

称えました。続いて登壇したグレース・チャン氏(WBUAP マッサージ委員会委員長)と石井靖乃氏(日本財団)も、それぞれの立場から、アジアに医療按摩を普及するためには指導者間の交流や対話が不可欠との認識を示し、指導者相互の国際ネットワークの構築を目指す AMIN の活動に大きな期待を表明しました。

開会式に続いて行われた記念講演では、独立行政法人高齢・障害者雇用促進機構の指田忠司上席研究員が、「アジア諸国における視覚障害者の職業事情と展望」と題して、日本や欧米との国際比較の視点を交えながら、アジアの視覚障害者が抱えている職業問題の深淵を、氏自身の研究や豊富な国際活動を通して得た知見をもとに、わかりやすく解説してくださいました。この会議の基調に相応しい内容の講演だったと思います。

(3) 設立総会

2 日目には AMIN 設立総会が開かれました。長岡英司議長(筑波技術大学)の進行のもと、AMIN の組織の在り方や具体的な活動をめぐって活発な意見交換と質疑が行われました。討議の結果、医療按摩の普及を促すため WBUAP マッサージ委員会との協力関係を強化することの重要性を確認し合った上で、当面は、筑波技大に設置する推進委員会主導で指導者育成、テキストの作成等の事業を推進する規定を盛り込んだ、AMIN 規約案が承認されました。

今年度の事業計画としては、海外講習を軸にした指導者育成を進める一方、テキストの英語・現地語への翻訳、講習対象国への人体模型や治療用ベッドなど教材・備品の供与、メーリングリストの立ち上げなどを進めることになりました。事業の柱となる指導者育成事業の今年度計画では、マッサージの普及が途上ない後発にある国を優先するという基本方針のもと、カンボジア、ラオス、ベトナム、モ



会場の様子

ンゴルに講師を派遣する海外講習と、マレーシアからマッサージ指導者を招いて行う国内講習の企画がすでに進行中です。

(4) 国際シンポジウム

設立総会に前後して行われた国際シンポジウムは公開ヒアリングの形式で進められました。今回の会議に合わせて提出されたリアルレポートと「視覚障害者の職業実態に関するアンケート」の結果を題材に、各報告者から、自国の視覚障害者の就学や就業の実態、マッサージを教える指導者や学校の数、社会の理解度などについて詳細な報告を受けた後、座長やフロアから質問を投げかけ、よりリアルな現状に迫ろうという企画です。このヒアリングに参加した人々は、異口同音に、域内の多様な実態を理解し合えたこと、自国が置かれている現状や位置が客観的に認識できたことが良かったと、感想を述べていました。このことはAMINの活動を展開するための基礎として重要なことであり、その意味で、公開ヒアリングは当を得た企画だったと思います。

2. AMINの意義と今後の課題

今回の会議をとおして、東南アジアの国々でもマッサージを業とする視覚障害者が少しずつではありますが着実に

増えていることが明らかになりました。これは長年にわたる全国の盲学校や沖縄プロジェクトなど地道な国際支援の成果に他なりません。しかし、指導者、学校、テキストなど、マッサージ師の養成に欠かせない教育基盤が絶対的に不足している状況に変わりはなく、業の普及の歩みを著しく遅らせていることも事実です。こうした中で、新たな人材の育成と既存の指導者のグレードアップを目指すAMINが設立されたことは、アジアの視覚障害者にとって歴史的な一歩であり大きな福音となることでしょう。

ただ課題も多くあります。まず、指導者育成が、短期講習の積み重ねだけで、はたしてどの程度、実を挙げられるかが不透明な点です。早晩、長期に海外派遣できる講師の確保が迫られることでしょう。また、これらの支援は、拠点となり得るいくつかの国に集中的にフォローアップ講習を実施するなど、戦略的な視野がかかせません。また、通訳の問題も大きな課題です。医学用語を日本語と現地語に通訳できる人材を確保することさえ大変ですが、按摩・マッサージの技術用語や東洋医学の専門用語を通訳できる人は希有といって過言ではありません。さらに、1期5年でスタートした本事業が終了した後のフォローアップをどうするか。AMINを自立した当事者組織として育て上げるための効果的方策は何か等々、残された課題の種はつきません。

おわりに

公開ヒアリングとアンケートの結果をとおして、視覚障害者の自立を可能にする医療按摩の普及を渴望するアジアの思いが、改めて浮き彫りになりました。今回の会議は、AMINという気球に、その思いと夢を吹き込むための行程だったと思います。これからは、膨らんだ気球を空高く上げる作業が待っています。多くの方々のご支援による追い風を期待してやみません。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 藤井 亮輔

● ギャロデット大学と大学間交流協定を締結

11月2日、米国ワシントンDCにあるギャロデット大学(Gallaudet University)のロバート・ダヴィラ学長とライトル学長補佐教授を天久保キャンパスにお迎えし、本学にとって九番目となる大学間交流協定の締結式を行いました。本交流協定は開学以来の念願であり、本交流調印式を創基20周年記念事業の一環として位置づけられています。締結式は本学の竹田理事、村上副学長ほか各部局長、関係教職員が臨席するなか、大沼学長とダヴィラ学長が協定書にサイン、交換することで執り行われました。

ギャロデット大学は1864年、リンカーン大統領が署名して格上げされた世界で最も歴史のある聴覚障害者のための大学で、エドワード・マイナー・ギャロデットが初代学長です。本学前身の筑波技術短期大学が創設にあたっては、米国ニューヨーク州、ロチェスター市にあるNTID(アメリカ聾工科大学、1992年大学間交流協定締結)とギャロデット大学が参考にされたとのことです。一昨年、4年制



協定書を掲げる大沼学長とダヴィラ学長

大学に移行した本学の重要課題の一つに大学院の設置が挙げられます。技術系の専門教育に加えて障害者支援や聾研究の教育研究体制の確立は必須です。この点でも既に11学部の大学院を有するギャロデット大学は本学の大学院カリキュラム構築に多くの情報や示唆を与えるものと思われる

ます。協定に基づき、今後は教育方法、学術研究に関する情報交換をはじめ、国際シンポジウムの開催、学生・教職員の活発な交流を行う予定です。3月には当交流協定を記念

して4名の学生と2名の引率教官がギャロデット大学を訪問することになっています。

障害者高等教育研究支援センター 須藤 正彦

●「第3回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」を終えて

10月20日(土)全国の大学・短期大学で学ぶ聴覚障害学生への支援をテーマとしたシンポジウムが開催されました。このシンポジウムは、本学が中心となって運営している日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)の主催で実施したもので、本学関係者を含む181名が集結する大変盛大な会となりました。ここでは、当日行われた各企画の様子についてご報告します。

午前中の分科会では、「支援体制」、「エンパワメント」、「情報保障の質」という、いずれも解決すべき課題として指摘されているトピックを取り上げ、話題提供者を迎えて事例報告や討論が行われました。分科会1「一から始める学内の支援体制作り」では、「支援体制作りには何が必要か」というテーマでグループ作業を行いました。体制構築のために必要な要素や課題となる事柄を洗い出し、カテゴリーに分類して1枚の模造紙にまとめる作業を通し、参加者それぞれが次の課題を発見したり、他大学の関係者と情報交換をする契機となりました。分科会2「聴覚障害学生のニーズとエンパワメント」では、聴覚障害学生がニーズを発見し、学生生活を充実させていくための取り組みについて、アメリカ及び日本の大学での事例報告が行われました。フロアからも積極的に質問が出され、活発なディスカッションが行われました。分科会3「利用学生・情報保障者・教員の3者による情報保障の質的充実」では、授業における情報保障の質的向上のための取り組みについて、聴覚障害学生、ノートテイク、教員の立場から話題提供がなされました。ディスカッションでは、教員が積極的に関わったり教職員を巻き込みながら、質の高い情報保障を行っていくための方策について意見交換がなされました。



分科会の様子

昼食休憩の時間には、今回が初の試みとなるランチセッションを行いました。前回のシンポジウムで参加者から挙がっていた、「参加者同士の情報交換の場がほしい」という声を受けて企画したもので、体育館を使って各大学の取り組みや先端の支援技術に関する展示、書籍や啓発マテリア



ランチセッションの様子

ルの紹介などが行われました。1時間半という限られた時間でしたが、会場内では、参加者同士で交流を深めたり資料や展示を見て情報収集したりする様子が見られました。

午後の全体会前半は、アメリカの大学で支援コーディネートを担当している Patricia A. Billies 氏、Marcia E. Kolvitz 氏のお二人からお話をうかがいました。障害学生支援室では実際にどのように相談が行われていて、実技を伴う授業の情報保障ではどのような工夫がなされているのかなど、写真をまじえながら大変具体的な状況を聞くことができました。質疑応答では、就職支援や大学入学前までの支援についてフロアから質問が投げかけられ、高等教育機関に限らず幅広くアメリカでの支援状況に関心が寄せられていることが窺われました。



2名の米国から来た支援コーディネーターとの対談

後半のパネルディスカッションでは、非常勤コーディネーターの松原崇氏(大阪大学)、事務職員の立場から長澤慶幸氏(同志社大学学生支援センター)、支援担当教員の金澤貴之氏(群馬大学)から、それぞれの大学で支援体制が成熟する過程や現状の課題、学内での役割分担について話題提供が行われました。指定討論者の今村彩子氏からは、障害学生の支援に対する潜在的なニーズをいかに引き出すか、障害学生が卒業しても途絶えない支援体制をいかに築くか等について指摘がなされ、支援関係者を組織化し、体制強化につなげるための方略について議論することができました。



パネルディスカッション

本シンポジウムは今回で3回目を迎え、回を追うごとに参加者同士のつながりができ、関心も高まってきて、聴覚障害学生支援が着実に広がりを見せていることが窺われます。支援現場にいる多くの関係者が知識や情報を共有し、聴覚障害学生の学ぶ環境がより改善され発展していくよう、今後も実りある議論を深めていけるよう、回を重ねていきたいと思います。

障害者高等教育研究支援センター 白澤 麻弓

● 鍼灸学専攻の第3回中国視察研修報告

1. はじめに

保健科学部鍼灸学専攻では国際交流活動の一環として、第3回「視覚障害者の鍼灸按摩教育に関する日中国際交流」、いわゆる、中国視察研修を実施しました。

今回は教員3名と学生7名が参加しました。学生への募集は鍼灸学専攻の全学生に呼びかけ、選抜に際しては講義に対する取り組み、出席状況、中間テストの成績および中国視察研修の参加動機レポート等を参考資料としました。

視察研修は北京連合大学特殊教育学院を初めとする受け入れ機関の協力も十分に得られ、また、参加者が体調を崩すことも無く順調に実施され有益な研修となりました。日程に沿って研修の概要と学生の研修レポートを織り込んで報告いたします。

2. 研修目的

大学間交流締結校である北京連合大学特殊教育学院等を訪問し、合同授業等の教育交流活動を行うとともに、両国相互の伝統的な鍼灸按摩法の知識あるいは技術を習得する。また、中国における教育と医療の視察を通して本学の教育活動の改善に資するとともに、視覚障害者を取り巻く歴史、現状について理解を深め、この分野の国際的な発展を検討する。

3. 研修参加者

学生：新井康之、石井孝司、風岡秀典、河合八重子、川村怜、佐久間龍一、中村絵理子(全員一年生)

教員：坂本裕和、野口栄太郎、木村友昭

4. 研修日程及び訪問先

第1日目：平成19年12月2日(日曜)

成田空港(10時45分発)→北京首都国際空港(13時55分着)

午後：日中国際交流の日程の打ち合わせ

第2日目：12月3日(月曜)

午前：北京連合大学特殊教育学院訪問、教育施設の見学及び按摩の合同授業を通しての技術交流

午後：「天壇公園」訪問

第3日目：12月4日(火曜)

午前：「万里の長城」訪問

午後：北京玉手緑盲人按摩保健按摩院での施術体験

第4日目：12月5日(水曜)

午前：北京按摩病院の見学

午後：北京連合大学特殊教育学院での特別講演

野口栄太郎教授 演題「鍼灸と体性自律神経反射」

第5日目：12月6日(木曜)

午前：中国中医科学院鍼灸院の見学

北京首都国際空港(15時30分発)→成田空港(19時50分着)

5. 施設研修および見学

1) 北京連合大学特殊教育学院の訪問

最初の研修先として北京連合大学特殊教育学院を訪問しました。まず、曲学院長と面談し、日中国際交流の目的および日程等の話し合いを行いました。曲院長は約1ヶ月前、本学の開学二十周年記念事業の一つである第8回国際シンポジウム出席のために来日されており、教員3名はその際にお会いしていましたので温かく迎え入れて頂きました。学内研修の前半は、図書館、ピアノ調律室あるいは解剖実習室等の視覚障害学生のための教育施設を見学しまし



北京連合大学特殊教育学院 曲学院長との面会



音声対応コンピュータと点字図書が並ぶ図書館の風景

た。図書館では本学にも設置されている拡大読書器や音声対応のコンピュータ等が何台も並んでおり、学生たちは自分の目的に合った機器を利用して勉学に励んでいました。ピアノ調律室は廊下を挟んで60以上の個室にピアノが一台ずつ備え付けられており、ピアノの調律と修理の実習が出来るようになっていました。解剖実習室では、お馴染みの「声の出る経穴人形」の他に大脳、脳幹あるいは各種の内臓など多くの利用しやすい模型が並んでおり、自由に活用出来るよう配置されていました。



ピアノ調律室の風景

後半は、特殊教育学院鍼灸マッサージ専攻の学生(5年制の3及び4年生)と本学学生とがペアになって按摩の技術交流と意見交換を行いました。本学学生は全員が1年生であったため、初め中国の学生から按摩施術をしてもらいました。手の使い方や体重移動あるいは揉むべき場所の正確さなどの技術に対して本学学生は驚きを隠せませんでした。お返しに本学学生が入学してから半年間で学んだ按摩施術を中国の学生に行いました。中国語・日本語・英語そして身振り手振りなど全てのコミュニケーション手段を使って意思疎通を行い、中国按摩を吸収しようとする本学学生の真摯な態度が伺われました。本学教員も按摩施術を受けましたが、その中の2、3人の学生は日本語を流暢に話し、日本への研修を熱心に希望していました。



按摩の合同授業(中国学生による施術風景)



按摩の合同授業(本学学生による施術風景)

研修4日目の午後に野口栄太郎教授の特別講演の機会を与えて頂いていたので、再び特殊教育学院を訪れました。初め予定していた会場では学生及び教員が入り切れず、急遽大講堂に変更されましたが、それでも満席に近い状態でした。講演の前半は日本の鍼灸手技療法の歴史と中国との関係について、また後半は野口教授の日頃の研究内容を中国の研究者と深い関わりを持ちながら行われている現状について話されました。講演を聴く態度や講演後の質疑応答などから、中国の学生達が日本に大きな関心を持っていることがひしひしと感じられました。



野口栄太郎教授による特別講演風景

【学生研修レポート抜粋】

北京連合大学においては、大学構内の施設を案内していただくとともに、中国式按摩の施術を特殊学院3年生の学生さんから我々7名が受け、その後、相手の学生さんに日本式按摩の施術を行いました。自分の按摩の技術が1年生の未熟なものであったため、日本式の按摩をきちんと施術できなかったことは、相手の学生さんに申し訳ないと感じている。

(石井 孝司)

研修先の一つである北京連合大学の特殊教育学院の生徒たちと、施術をしあった。施術を受け、私が感じた印象は、非常にダイナミックの動きで力強く、自分たちが学んできたものとは違うということだった。

(佐久間 龍一)

北京連合大学特殊教育学院での按摩の技術交流会で、受けた按摩は、琴の弦をはじかれているような響きがあった。また、視覚障害者のためのピアノ調律師養成の教室を見学した。就職率が100%と伺った。中国では経済発展しているのでこの仕事も需要が有るのだろうと思った。

(河合 八重子)

2) 北京按摩病院の見学

北京按摩病院のほぼ全ての部門を見学しました。基本的には西洋医学を融合させながら按摩を通して疾病を治療することを目的とした施設で、特に、脳性麻痺の乳幼児の治療風景を見学しました。母親が毎日のように子供を病院に連れて来て、硬直した身体を揉み解してもらっているのを心配そうに眺めている様子に学生達は引きつけられました。また、病院には大阪府立盲学校出身の鍼灸・按摩師の先生が勤務されており、中国の按摩制度および視覚障害按摩師の就労状況について1時間程懇談して頂きました。

【学生研修レポート抜粋】

北京按摩病院は、最も興味を持っていた訪問先である。出発前に配布された資料には、「1958年開院、中国で初め

て視覚障害者の施術者を雇用した医院、常勤スタッフ 150 名(現在視覚障害者 40 名以上)、1 日の外来患者 600 名以上」とある。日本の治療院規模と比較すると、かなり大規模な医院といえる。どんな形態と方法で治療と経営が行われているのか。まず驚かされたのは、建築のデザインであった。中庭を取り囲むように贅沢に配置されている施術棟は、赤と緑をアクセントに配した美しい北京様式の伝統建築であった。築 100 年以上の建築物ということであるが、内部は現代の医療機関に求められる機能を満たすように改装されていた。建築に伝統と現代の調和を見ることが出来た。医院の組織は、専門別に部門分けされていた。入院部門、按摩部門、鍼灸部門、理学療法部門、放射線部門、研究部門、薬局で構成されていた。スケールメリットを生かす現代的経営形態で運営されていた。大規模鍼灸按摩医院のひとつのモデルケースとして大変参考になった。治療は、受付→医師による診察→放射線等の理学的検査→診断・治療計画作成→治療(鍼灸按摩・理学療法・漢方薬)という流れをとっていた。診察から治療の流れは、本学の附属東西医学統合医療センターとの共通点を見ることが出来た。

私のなかではこれまで、中国における鍼灸按摩はかなり伝統的な治療方法や経営形態をとっているという認識であった。しかし、北京按摩医院が提示してくれたものは、一歩進んだ、伝統と現代の知恵を調和させたものであり、今後日本が進んでいくひとつの方向性を与えてくれるものであった。(新井 康之)

北京市内のいくつかの病院を訪問し中医学を目にしてきたが、日本の鍼灸按摩についてまだ詳しくないので比較はできないが、中国では、鍼灸按摩を医療とともにに行っており、興味深いものも多くあった。特に、小児麻痺の乳幼児たちへ按摩を施している様子は目に残った。また、中国での鍼灸按摩の国家資格に関する法律は確立されていると思っていたのだが、まだきちんと整備されていないのには意外だった。(佐久間 龍一)

3) 中国中医科学院鍼灸医院の見学

中国中医科学院鍼灸医院もやはり西洋医学を取り入れながら、鍼灸施術を通して疾病を治療する施設です。顔面の吹き出物、婦人病疾患、片麻痺、筋への通電刺激による治療等を見学しました。日本で使われている鍼の太さとは比べものにならないくらい太い鍼には驚きました。また、外国からの研修生の受け入れ制度があり、数人の欧米人が研修をしていました。

【学生研修レポート抜粋】

北京按摩医院及び中国中医科学院鍼灸医院では、脳性麻痺の子供への施術や、日本では鍼灸師が行えない「瀉血」などといった患者さんへの治療風景を見学し、中国においては疾病の治療を鍼や按摩といった中医学を用いて行われることが、人々にとって日常的なものとなっていると感じました。(石井 孝司)

5 日間の研修の中で私が最も印象深かったのは、現地の 2 カ所の病院を訪れた時のことだった。共に鍼灸・按摩を主とした治療法で、日本では見られない光景がそこにはあった。鍼は日本で使用しているものよりもずっと太く、ダイナミックに使用していた。また按摩も体全体を使って、

とてもパワフルに施術を行っていた。そこでの衝撃は大きかった。

(川村 怜)

4) 北京玉手緑盲人按摩保健按摩院での施術体験

北京玉手緑盲人按摩保健按摩院は仕事での疲れ、あるいはストレス等を緩和するためのリラクゼーションを提供する施設です。安らぎが得やすい造りで、教員と学生の全員が施術を受けました。約 2 時間を要して全身および足底を中心とした按摩が行われ、施術が終了した時には、午前中に訪問した「万里の長城」での疲れは完全に消えていました。施術者は国家労働部が発行した按摩師の証明書を持った視覚障害者が中心で、就労の場となっています。

【学生研修レポート抜粋】

北京玉手緑盲人保健按摩院でのプロによる全身按摩の体験は、学生によるものとはまた違い、施術を通じて被施術者に治療とともにリラックス感を与えるものであると感じました。施術を受けての感想としては、按摩の施術を行う際の上肢の使い方や筋の揉み方などが、中国式と日本式で異なっている部分があり、それを自分の身体で体験できたことは貴重な体験となりました。(石井 孝司)

北京玉手緑盲人按摩保健按摩院で受けた按摩は、リズムカルで心地よかった。学校で習っている技術の応用だとは思うが幅の広さを知った。(河合 八重子)

6. 中国文化に触れる

鍼灸手技療法研修の合間に気分転換も兼ねて、中国 4000 年の歴史を漂わせる「万里の長城」、「天壇公園」の訪問やお土産等の買い物を兼ねた北京市街見学が実施され、それぞれの場所で中国文化に触れました。

1) 万里の長城訪問

万里の長城は中国が世界に誇る遺産で、中国を訪れた際には一度は体験すべき場所です。北京からバスで 1 時間程の距離に数カ所の長城が存在するが、その中でも人気随一の「八達嶺長城」を訪問しました。幸運にも天気にも恵まれ、今年は寒さも弱いとのことで積雪も無く、壮大な風景が目の前に広がり、中国の悠久の歴史を実感しました。それに反して、長城へのアタックは急激な階段状あるいはスロープ状の坂や、また強い風で身体が吹き飛ばされそうにもなり苦労しました。頂上に達したときには、学生に手を引いてもらっている状態で体力の無さを痛感しました。

【学生研修レポート抜粋】

中国研修では、いろいろな所に行ったが、一番印象に残ったのは「万里の長城」である。世界遺産なだけあり、と



万里の長城に立つ

でも雄大で壮大だった。北京オリンピックが開催されることともあいまって、『one world, one dream』と書かれた看板があったりして、とても貴重な体験だと感じた。

(中村 絵里子)

観光で、印象に残った所は、万里の長城である。それは、10数年前、すぐそばまで行ったが、雪のため長城に到達することができなかったからだ。平山郁夫の万里の長城の絵を見てぜひその場に立って見たいと思っていた。壁と階段は、十分に私を感動させた。

(河合 八重子)

2) 天壇公園訪問

天壇公園は明清時代の皇帝が毎年正月に五穀豊穡を祈った場所で、非常に歴史が感じられる建築物が整然と建ち並んでいました。公園を代表する祈年殿は北京の青空によく映えた美しい木造建築物で、建物の欄干、階段の数はすべて古代中国において皇帝の数字である9の倍数となっているのには驚かされました。北京オリンピックのマラソコースにもなっているとのこと。



天壇公園を代表する祈年殿の前で

3) 北京市街見学等

滞在期間中の楽しみの一つは、北京料理を堪能することです。ホテルでの食事を除いてはすべてレストランに連れて行って頂いて、そのお店推薦の料理を食することが出来ました。肉料理、魚料理、豆腐料理、野菜炒め、炒飯、炒麺、湯麺、ジャージャー麺、餃子類、肉まん等、日本でも耳慣れた料理であるが、北京で食べる料理はひと味もふた味も違ったものでした。さらに嬉しいことには、いくらお腹一杯に食べても驚く程安かったことです。安心して心ゆくまで北京料理を堪能することが出来ました。

滞在2、3日目にとってもコーヒーが飲みたくなり、学生二人を伴ってマクドナルドに行きました。学生達は本学で中



北京料理を堪能する

国語講座を受講しているとのことで、店員さんに習いたての中国語でお目当てのものを注文していました。中国語が挨拶程度の私は、恥も外聞も無く学生に頼んでコーヒーを注文してもらいました。その時の、学生の得意げな顔は忘れられません。

滞在最後の晩に、お土産を買うため北京市街に出かけました。帰国後も楽しめて、しかも途中で変質しないお茶はそれに最適です。お店に入ると、お客さん一人に若い女性の店員さんが2～3人で寄って来てお茶の試飲を猛烈に進めてくるので、値切るのも忘れてつい買ってしまいました。しかし、学生の中には粘りに粘って、かなり値切った猛者もいました。学生の多くは日本で待っている両親や兄弟あるいは大学に残って勉学に勤しんでいる友達の顔を思い出しながら、沢山のお土産を買い込み満足そうにホテルに帰る様子は微笑ましかったです。

【学生研修レポート抜粋】

中国研修で一番学んだことは「文化の違い」である。国民の数が世界一かつその国の首都ということもあり、「千差万別」という印象を受けた。とにかく、車と自転車が多かった。そして、並走していることに驚いた。細い路地に入ると手押し車なども見受けられたが、少しずつ発展している様子が見て取れた。

(中村 絵里子)

私がこの研修に参加した理由は、中国の文化を実際にこの目で見てみたいという希望があったからだ。私のイメージでは、道路を自転車が覆い尽くしているような光景が浮かんでいたのだが実際は車が大半で、もちろん自転車も数多く走っているが、車社会であることを認識させられた。交通マナーは悪く、恐ろしいという印象も受けた。食事に関しても日本の料理よりも、味濃いものが多かった。値段を聞いたところ、日本に比べると安価であることがわかり、物価の違いなども確認できた。

(佐久間 龍一)

今回の研修での個人的なテーマは『現地の人々とのふれあい』ということだった。行く先々で積極的に中国語で話しかけ、十分にコミュニケーションを楽しむことができた。そういった意味でもとても勉強になったし、改めて語学力の必要性がわかった。

(川村 怜)

今まで私は、中国はそんなに発展のしていないイメージがありましたが、思っていた以上に発展しており、高層ビルなどたくさん建っており、東京とあまり代わりのない感じを受け、日本と比べてもそう違いはないと思いました。

(風岡 秀典)

7. 成果および感想

特殊教育学院鍼灸マッサージ専攻の学生と本学学生との按摩マッサージ技術交流、北京按摩病院および中国中医科学院鍼灸医院の見学そして北京玉手緑盲人按摩保健按摩院での実体験を通して、両国相互の伝統的な鍼灸按摩法の相同と相異を理解し、今後の本学の教育活動の糧が得られました。また、中国の鍼灸按摩制度と視覚障害者の就労状況の理解が得られました。

【学生研修レポート抜粋】

この研修へ参加したことで、鍼灸や按摩への見聞を広げることができ、それを今後の自分に生かせればと考えています。それ以上に、一緒に研修した学生の皆さんや引率の

先生方との親交を深めることができたことは、普段の大学生活では得ることのできないもう一つの収穫となりました。

(石井 孝司)

まだ一年生ということもあり、医学的知識が少ない状態で行ったので、理解しきれないところもあったが、今回研修に参加したことにより、今後鍼灸を勉強していく上で役立つことも学び、本当にいい経験ができたと思う。

(川村 怜)

私は、視覚障害者になってから、初めての海外旅行であったので少し不安があった。白杖を使っているのは私だったが、3人の先生と7人の学生と中国の親切な案内者達のお陰で、有意義な旅行となり感謝している。鍼灸を学び終えて、機会があれば、また中国を訪れたい。

(河合 八重子)

中国研修は、様々なハプニングがあり、なかなか経験することのできない体験もたくさんできました。自分自身痛感したのは、海外に行く際は、英語は絶対に必要であると

いうことだった。

(風岡 秀典)

8. 謝辞

最後に今回の中国研修に際して、日程の調整から訪問先との交渉あるいは北京市街の案内までご協力を頂いた北京連合大学国際部の Luo Dan 女史に心から感謝の意を表したい。北京按摩病院の見学予定日に日本で学ばれた先生がいらっしゃらないことが分かると、急遽先生の出勤日に予定を変更して頂いたり、本学学生の予定外の市街見学の希望を快く聞き入れて下さったり、しかもご自身で案内までして頂きました。このような心のもった持てなしは我々の記憶にいつまでも楽しい思い出として残るでしょう。我々が外国の方々を受け入れる立場になった時には、同じような思い出を持って頂けるような対応をするよう肝に銘じなければならぬと感じました。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻

木村 友昭、野口 栄太郎、坂本 裕和

● 第2回大学人会を開催

平成19年11月7日(水)に春日キャンパスで100名を超える参加者が集い第2回筑波技術大学・大学人会が開催されました。大学人会は、教員・職員・学生の枠、OB・現役の枠を超えた旧交を温める会にしたいという大沼学長の提案で、昨年、第1回を開催し、今回は本学が設置されて20周年を迎えたことから、創基20周年記念交流会として企画、卒業生1,187名、教職員OB571名、現役の学生・教職員487名と本学の運営に関わる学外委員及び非常勤講師等、2,000名を超える方々に案内されました。

第1部は平成18年度に本学が行った教育研究等高度化推進事業に採択された中から触覚ディスプレイによる数値データの動的な呈示に関する研究、及びパソコン要約筆記の技術向上に関する研究など8件の研究成果報告が行われ、講評として菅井邦明監事(東北福祉大学 総合福祉学部



近況報告

教授)から、複数の学会を回らなければ聴けない様な広範な研究内容と、障害者教育に携わる者なら多くが興味を引かれる題材とその先進性について、評価されました。

第2部として、大沼学長から財務状況及び国際活動などの近況報告があり、特に2件のGP、社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム(学び直しGP)に『聴覚障害者のみを対象とする大学・学部の資源を活かした職業技術学び直しプログラム』と、新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)に『視・聴覚障害学生の専門性を高める学習支援』が採択されたことの報告がありました。

第3部として、会場を食堂に移し、黒川哲宇名誉教授の司会で交流会が開かれ、旧交を温めました。

総務課



研究成果報告